

Title	漢字をあてる : 「多情多恨」表記考
Author(s)	玉村, 文郎
Citation	大阪外国語大学学報. 29 p.123-p.134
Issue Date	1973-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80464
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

漢字をあてる

——「多情多恨」表記考——

玉 村 文 郎

On the Use of Kanji in Ozaki Koyo's "TAJOTAKON"

TAMAMURA Fumio

There are many difficulties in the writing of Japanese today. One of the reasons for this is the use of both Japanese syllabaries and Kanji concurrently. Some native Japanese words cannot be expressed by Kanji, but Ozaki Koyo (1867-1903) has attempted to do this. He has even used Kanji to express onomatopoeic words.

In this paper, I have analysed his use of Kanji in "TAJOTAKON", generally considered to be his best work, and investigated his attitude and the difficulties encountered by him in the use of Chinese characters to express Japanese words.

This treatise forms a part of a future study of the use of Kanji in Meiji literature.

1 日本語における表記の特質と問題点

一般に表記の体系は、音韻と深い関連をもつものであって、多くその表記法の成立した時期の音韻体系をかなり忠実に反映している。従って、いずれの言語にあっても、表記法というのは、ソスュールのいうところの「ラング」に属するものと見られるのは、当然のことからである。

しかし、目をわが日本語に転じたとき、そこでは表記法というものが、「ラング」的に明確な体系性をもったものとしては存在していないことに、われわれは気づくのである。ここに "orthographe" とか "Rechtschreibung" とかの概念が、わが日本語について未成立であることを考えねばならない。^{註1} これらの術語も、元来は技術の社会的必要に応じて、生み出されたものであろうが、本来、古くから語の「分かち書き」を唯一の方式としてきた西洋の諸言語においては、通常は、もっぱら「単語を正しく書き表わす方法」の意として用いられてきたもので^{註2} あって、いわゆる「表記法」とは若干次元を異にするものである。

ここで、ことさら「文字」を用いず、「表記」という語をもち出したのは、前者が言語を書き表わすための手段であるのに対して、後者は、文字や符号による言語の書き表わし方の総称として用いられており、かつまた、後者の方が用法が広いからにはかならない。^{註3} つまり、西洋式の

概念では把握しきれない日本語における表記の姿をとらえようとしたからである。

われわれの祖先が、漢土伝来の文字を使用する中で、漸次「漢字かなまじり文」を定式化してきたことには、今日からは測りがたい無数の、甚大な努力や試みの集積があったわけであるが、日本語文を書き表わすのに、言語の性質を異にする中国語の文字である「漢字」をも併せ用いてきたことには、そもそも原理的な大きな矛盾が存していた。しかも「漢字かなまじり文」の方式が、ただ単に文のレベルだけでなく、単語のレベルにまで適用されて、用言の語幹と活用語尾とを漢字とかなで書き分け、さらには、無活用の体言にまでおし及ぼされて、「情け」「後ろ」などなどの表記を生み出し、「漢字かな併用」ないしは「漢字かな混用」が、今日まことに複雑な表記相を呈することになっている。

また一方、漢字の使用に支えられたおびただしい漢語の導入は、現代日本語の語彙の構造と体系に深く大きい影響を及ぼすまでになっており、文字の改革が、このような語彙の構造や体系の掣肘を強く受けて、容易には手がけられない状態になっていることも見落としてはならないところである。

こうして、われわれの場合、表記の方法が多分にパロールの性質を帯びる結果になっていることに注目しなければならない。現代日本語のように、「漢字かな併用」を標準的なものとしても、否、しているからこそ、「どんな漢字を用いるか」、あるいは「どの程度用いるか」、さらには、「送りかなをどこから送るか」などの点は、ほとんど個人の自由意志にまかされていて、パロールの問題と見なされる。戦後の一連の国字政策が、いくつかの指針を、これらの問題に与えはしたが、理論的にも実践的にも未整理未消化の点が多く、十分一般の支持を得るものになってはいない。ことに、和語に漢字をあてる面では、

①漢字の選択（泣・鳴・啼・哭など）

②送りかなのつけ方

などが、前述のように、個人の判断・学識・趣向など、つまり恣意にゆだねられることになっており、一段とパロール的にならざるを得ないわけである。そこにはまた、形音のほかに義をもつ漢字の特性と、もともと語を表わしていたための、表音文字には存在しないところの強い個別性・限定性が、書き手、とりわけ作家に大きい魅力をよぶこととなってきたことを併せ考えるべきである。とは言っても、文字とか表記とかは、強い固定化の力をもつものであって、ある程度使用が広がると慣用されやすく、その視覚に訴える形態や方式は、にわかには改めがたい状況にまでなる。例えば、和語「しごと」にあてられた「仕事」や同じく「びっくり」にあてられた「吃驚」などである。前者は、現在でも広く使われていて、鴟外のように「爲事」に書きかえることは容易ではない。また後者は、現在でこそかな書きになったが、作家によっては、戦後のある時期まで、漢語表記を採っていた。また、文字のことが政策的にとりあげられた際、「当用漢字表」のまえがき末項のロ・ホで、「代名詞…動植物の名称は、かな書きにする。」とはされても、教科書や官公庁印刷物を除いた一般世上の、ことに個人的な書き物では、多く「私」「君」「犬」「牛」「梅」「竹」などの漢字表記が依然として採られてきたことに、一旦固定した表記習慣の根づよさを見るべきである。

従って、「和語に漢字をあてる」場合を、原理的な考察は別にして、結果論的に、集団的か個別的か、社会的か個人的かという基準で概括的に眺めることができるはずである。鵜外が「爲事」をもって「しごと」とし、「目金」をもって「めがね」としていたのなどは、よし他の作家の若干の類例があったにしても、個人的使用の域を出ていない。

反対に、漱石が「^{とまど}戸迷ひ」「小供」「^{きつぱり}薩張」などと用いているのは、もう少し集団的事実と見なすべきであろう。

小考では、そういう意味で、漢字使用のパロール的側面について、尾崎紅葉の「多情多恨」をもとに考察しようとするものである。いわゆる「あて字」に含まれて考えられることのある誤字・うそ字などは一切問題にしない。

2 「多情多恨」の位置

紅葉が文章表現上、多大の苦心を重ねたことは、あまりにも有名な事実であって、多くの評家が指摘しているところである。その苦心の一つ——というより中心的なものと見なしてもいいもの——に、漢字使用の問題があった。その紅葉が、「疊字訓」なる備忘録めいたものを遺した事実は、十分注意されていいことであろう。先に、筆者は「疊字訓」について、基礎的な考察をした^{註4}が、それは、いわば作家の仕事部屋をかいま見たものであって、実作そのものの検討ではなかった。いま、文章表現上、とりわけ表記上注目に価するとされる「多情多恨」をとりあげ、作品の中での語の表記の実態を調べてみることにしたわけである。

3 「多情多恨」の音象徴語の表記の概観

「多情多恨」の語表記の状況についての全面的な調査分析は、煩瑣であるため、小考ではさらに範囲を限って、音象徴の語をもっぱら対象とした。漢字の^あて^は方^のも^とも代表的なものと考えられるからである。

そこでまず「多情多恨」に用いられた音象徴の語を概観する。

A 感叫応答詞の類

のべ語数	32語
異なり語数	15語
片かな表記語数	0語
平がな表記語数	8語
漢字表記語数	3語
漢字表記形式数	7種

あゝ（吁6，唉6，噫4，嗚呼1）

計 17例

うん（ん 1， 咩 1）

計 2 例

えい（えい 1）

計 1 例

B 擬声語の類

のべ語数 48語^{注5}

異なり語数 38語

片かな表記語数 7語

平かな表記語数 17語

漢字表記語数 15語

漢字表記形式数 13種

簾々（がさ） 檻々（がら）

軋々（きち） 咀嚼（くしゃ）

吃々（くす，くすり）

沸々（ぐつ） 踴躍（こつ）

鏗然鏗然（ちんからり）

丁（とん，どん） 丁々（とん）

丁々々（とん）

爆然（ぱっ） 颯々（びう）

和語量語 12語

漢字量字 8語

C 擬態語の類

のべ語数 524語

異なり語数 211語

表記形式総数 299種

片かな表記語数 1語（トンと）

平かな表記例のみの語の数

35語

漢字表記例のみの語の数

175語

漢字・平かな両表記例のある語の数

12語

漢字表記形式数 251種

ここで、A B Cを集計すると、

表 1

のべ語数	604語
異なり語数	264語
表記形式総数	352種
片かな表記語数	8 語
平がな表記語数	60語
漢字表記形式数	271種
片かな表記・平がな表記 両例をもつ語の数	1 語
漢字表記・平がな表記 両例をもつ語の数	12語
漢字表記の用いられた度数	500

という結果が得られる。

「多情多恨」に用いられた音象徴の語を、かりにA B Cに三分してみたわけであるが、狭義の擬声語Bと擬態語Cとの比率は、のべ語数で1対11、異なり語数では1対5.6となっていることがわかる。A B C全体ののべ語数604は、この作品での音象徴語の総出現数であるから、この数値がどんな意味をもつのかを調べる必要がある。他の作家については、さいわい安本美典氏の調査がある^{註6}ので、これを借りて、紅葉の「多情外恨」での数値を換算して対照すると、次表のようになる。

表2 声 喩 使 用 率 順

順位	作 家	作 品	発表年代	声喩	漢字
1	中 勘助	銀 の 匙	1915	44	227
2	平林 たい子	施 療 室 に て	1927	38	354
3	長塚 節	土	1910	35	390
4.5	泉 鏡花	高 野 聖	1900	34	360
4.5	小林 多喜二	蟹 工 船	1929	34	327
6	尾 崎 紅 葉	多 情 多 恨	1896	33.3	392
7.5	加能 作次郎	世 の 中 へ	1918	27	378
7.5	高見 順	故旧忘れ得べき	1936	27	306
9.5	鈴木 三重吉	千 鳥	1906	26	281
9.5	北 条 民 雄	いのちの初夜	1936	26	308
11	石川 淳	普 賢	1936	25	312
12	前田河広一郎	三 等 船 客	1922	24	364

表3 漢字使用率順

順位	作 家	作 品	発表年代	漢字	声喩
1	横 光 利 一	日 輪	1923	454	3
2	菊池 寛	忠直卿行状記	1918	447	11
3	滝井 孝作	無 限 抱 擁	1924	430	4
4	国木田 独歩	牛肉と馬鈴薯	1901	426	5
5	中島 敦	李 陵	1943	424	10
6	嘉 村 磯 多	途 上	1932	423	20
7	島 崎 藤 村	破 戒	1906	419	6
8	火 野 葦 平	麦 と 兵 隊	1938	414	14
9	田 山 花 袋	田 舎 教 師	1909	410	21
10	徳永 直	太陽のない街	1929	402	5
11	夏 目 漱 石	吾輩は猫である	1906	397	5
12	二葉亭 四迷	平 凡	1907	396	19
13	高 浜 虚 子	柿 二 つ	1915	395	6
14	尾 崎 紅 葉	多 情 多 恨	1896	392	33.3
15	長塚 節	土	1910	390	35
16	志 賀 直 哉	暗 夜 行 路	1937	388	5

こうしてみると、「多情多恨」の声喩出現率は、第6位に位置し、きわめて多くの音象徴語が用いられていることがわかる。さらに、声喩を多用している他作品の漢字使用率をここに考え合わせるならば、「多情多恨」の特徴が一段ときわだててくる。すなわち、中勘助以下の声喩を多用した作家の中では、ひとり長塚節のみが、紅葉に近い位置にあって、他はすべて漢字を多用した作家ではない——より正しくは、漢字を多用した作品ではない——ということである。このことは、文体や題材とも関連するわけであるから、にわかには断定できない問題でもあり（例えば、軍隊・官庁・法律・学生などに取材した小説では漢語が多いためにどうしても漢字がふえる傾向が強い。火野葦平「麦と兵隊」、石川達三「人間の壁」、吉田満「軍艦大和」²⁷など）、また、明治初中期までの作家と昭和の戦後の作家を同列に並べることができないわけであるが、漢字使用率順を示した表3を見れば、漢字使用率と声喩使用率が、本来的に相なじまないものであることが客観的に見てとれるはずである。してみれば、紅葉の、この「多情多恨」での音象徴の語の多用と相対的に高い漢字使用率ということからは、特筆すべき事象ということになる。相似た傾向をもった長塚節の「土」における漢字使用が、いわば一般語彙にあてられた漢字の多さであるのにひきかえ、紅葉の「多情多恨」のそれは、明らかにまた別個の様相を示していて、そこにこそ「多情多恨」の一大特徴があると見られるのである。その特徴を、さらに筆を進めて分析してみよう。

表1が示すとおり、「多情多恨」では、264個の異なり語を書き表わすのに、352個にも及ぶ表

記形式が採られている。これは、1語を表わすのに、平均して1.33種の表記形式が用いられていることを物語っている。この傾向は、Cの擬態語の類に限った場合、一層顕著となる。211個の異なり語を表わすのに、299種もの表記形式が採られていて、平均1.41種、実に1倍半に近い表記形式が採られていることになる。

しかも、かかる音象徴の語に漢字をどの程度あてたかを吟味すると、

表 4

類 別	A	B	C	計
異なり語数 a	15	38	211	264
漢字表記形式数 b	7	13	251	271
b/a	0.47	0.34	1.19	1.03

のようになり、C欄のb/aは、A欄B欄のそれが、0.34～0.47であるのに比して、1.19となっていて、顕著な傾向を物語っている。つまり、漢字によって表記された語の率が、AB類に比して、C類すなわち擬態語の類で、極端にふえているという事実である。このように見てくれば、「多情多恨」での漢字使用率が392パーミルという高率になっている一つの有力な契機が、明らかに音象徴の語、わけでも擬態語の類に、意識的に「漢字をあてた」ことであったことがわかるのである。ここに煩をいわず、関係する計数が相近いと見られる「土」の表記の一端を紹介すると、音象徴の語100につき、ほぼ平がな表記87語、漢字表記13語の割合と見られる。^{註8}これに対し、「多情多恨」では、17対83となって、漢字表記が圧倒的な優勢さを示し、比率そのものが逆転するのである。

以上、「多情多恨」における紅葉の表記の特殊相と、それを生んだ契機を明らかにすることができた。実際、紅葉の彫心蝕骨の苦心のかなりが、おびただしい作中の擬態語に、いかに適切な漢字をあてるかに費やされたと見られるのである。

4 「多情多恨」の音象徴語の表記の諸相

さて、前章で見てきた「多情多恨」の表記の諸相を、語とその表記との関連の中で、今少し詳しく分析してみよう。

4-1 同語異表記

すでに概観してきたように、「多情多恨」全体では、1個の音象徴語を書き表わすのに、1.33個の表記形式が使われているのであるが、この数値はもちろん平均値であって、各語に均等に表記形式があてられたわけではなく、語によって多少がある。

いま、同語異表記の例を簡単に紹介すると次のようになる。

ア. 1語8表記 ぼんやり（惘然7回、茫然6回、孑然3回、懵然2回、糛糊・遲鈍・陰々・漠然各1回）

イ. 1語7表記 ((しみ〜)) (浸々3回, 諄々・染々・懇々・しみ〜・浸潤・沁々各1回)

ウ. 1語5表記 ちゃん(と) (整然2回, 端然・歴然・瞭然・丁各1回)

エ. 1語4表記 あゝ きッと ぢッと ((つく〜)) ゆっくり 5語

オ. 1語3表記 あたふた ぐい(と) さっぱり しを〜 ぞっと はら〜 ふと まじ〜 8語

カ. 1語2表記 46語

同語異表記の語 計62語

ところで、これらの語には、一つの共通点があるようである。3種以上の表記形式を与えられたものには、とくに当時としては「漢字をあてる」傾向あるいは慣用があったものが多い。(このことは、一般的に、これらの語が、やわらかい文章の中でよく用いられる語であるということに深いつながりがあるはずである。) 多分に、漢字による表記の傾向や慣用があったこれらの語について、紅葉は、さらに個性的な新しい「あて字」をもって、表記の形式にヴァリエティをもたせたと考えられるのである。あるいは、さらにもっと積極的に、岡保生氏の指摘される²⁹ように、多義的な語を、漢字(漢語)の使い分けによって、個々の場面にふさわしく個別特定しようとしたと見てもいいであろう。

ついでに、1語1表記で、異表記をもたないものを見ると、202語に及んでいる。従って、264語中、わずかに4分の1弱の62語だけが異表記をもっている計算になって、前記1.33という平均値は、あげてこの62語にあてられた複数の表記形式がもたらしたものであることがわかる。紅葉が、他の作家とは比較にならないほど、文章・表記に心を砕いたことは事実であるが、一体どの程度まで統一的体系的意識的に、かかる表記を徹底したかについては、なお明らかではない。それゆえ、この同語異表記、1語1表記のそれぞれの語を調べた数値の意義づけについては、十分慎重でなければならないと思う。ただ、紅葉の関心、とくに「疊字訓」まで遣した事実を考え合わせるとき、1語1表記の語と異表記をもつ語との間に、本質的な違いを認めるわけにはいかないであろう。それは、ほとんど、作品の中での語の使用頻度にしかかかわっていないと見るべきである。

4-2 異語同表記

当然ながら、漢字表記のみが問題になる。

(1) ヴァリエーション同表記 (○内の数字は使用頻度数)

漫然(うか②, うっかり④) 吃々(くす〜③, くすり〜①) 呷(と)(ぐい②, ぐっ③)
確乎(しか①, シっかり①) 悚然(ぞうッ①, ぞっ⑦) 隠顯(ちら〜①, ちらり〜①)
衝(と)(つ⑨, つい②) 犇(びし〜①, びし〜①) 閃寂(ひっそ①, ひっそり①) 趑然
(ひよい①, ひよっこり①) 弗(と)(ふ①, ふッ①) 惘然(ぼん①, ぼんやり⑦) 怫然(と)
(むっ①, むつつり①)

計13種

(2) 2語同表記

周章（あたふた①，へどもど①）淡泊（あっさり①，さっぱり①）斷然（（いよ〜）④，きっぱり①）不覺（うか①，すゝろ①）忸怩（うじ〜①，もじ〜③）偶然（うっかり①，ひよっと①）劃然（かっきり①，くっきり①）整然（きちん①，ちゃん②）慄然（ぎよっ④，ぞっ①）遅々（ぐづ〜⑥，のそ〜①）懇々（（くれ〜）②，（しみ〜）①）匆々（さっさ④，（そこ〜）④）消々（さめ〜①，はら〜②）倉皇（（そこ〜）①，そゝくさ①）秩然（ちん②，ちんまり①）孑然（ぼつん①，ぼんやり③）

計16種

(3) 3語同表記

狼狽（うろたへ②，へどもど①，まご〜①）凝然（しげ〜①，ちっと②，（つく〜）①）徐々（（しづ〜）①，そろ〜①，ぼつ〜①）丁（と）（ちゃん①，とん①，どん①）飄然（ふい②，ふい①，ふらり②）滴々（ばた〜①，ぱたり〜①，ほろ〜①）

計6種

(4) 4語同表記

端然（きちん①，しやん①，ちゃん①，ちん④）全然（さっぱり⑥，すっかり⑤，すっぱり①，そっくり②）

計2種

合計37種

上の整理から、①作者紅葉が、音象徴の和語に漢字（漢語）をあてゐるのに、実に多くの苦心をしたであろうこと、②多種多様な和語に漢字（漢語）をあてゐる際に、別語別表記という、当然一往は考えられてしかるべき基準をもたなかったこと、③従って、語としての和語よりも、表記としての漢字の方に、明らかに強い意識がはたらいていたと見られること、④結果、この場合、性質上とくに重視されるべき和語の外形（音相）は副次的な背景とされ、（それは、外形がルビという補助手段によってかろうじて示されている事実の端的に反映している。）大体において、漢字の形・義が主役を演じていることなどがわかる。

創作活動がどれほど複雑で流動的でないとなみであっても、紅葉の創作態度と文章観を知る限りは、不容易に4語同一表記をしてしまったというようなことは考えにくいのである。

いずれにしても、以上のことは、漢字をもってこの種の個々の和語を的確に書き分けることが、とうてい可能でないことを裏書きしているのである。

4-3 漢字表記の性質

「多情多恨」に多い音象徴の和語にあてられた漢字を、その和語との関係において眺めてみると、271種の形式のほとんどすべてが、「焦燥」（あたふた）、「的礫」（きら〜）、「墨々」（まじ〜）のような「借義用法」である。この特徴は、別に吟味した「疊字訓」での漢字の掲載法に見られる傾向と同じである。この「借義用法」は、いわゆる「訓よみ」にまでいまだ成長していない字義（の一部）を借りるもので、意識的に和語と漢語との直線的な対応を試みたもので、

漢字をあてゐる代表的な場合である。この場合は、和語の音相と漢字音とのつながりは一切捨象されており、「借訓用法」ではないために、和語と漢字とのつながりは非常にゆるく、個人的恣意的なレベルでの連合にとどまっている。

この「借義用法」のほかには、

「借音用法」 呷（うん）と 呷（うん）と 曳々（えい〜） 岸破（がば） 呷（ほっ）と 弗（ふ）と 發矢（はっし）など

「借訓用法」 苛々（いら〜）浸々（（しみ〜）） 薺（ひし）と 活潑（（いき〜））など

「借音借義用法」 氣凜（きりっ）と 四合（しっくり） 發揮（はっきり） 芬（ぶん）と 呷（ほっ）と 平坦（ぺたん）

（類例） 盱々（くり〜） 悄然（しよんぼり） など

「借訓借義用法」 悶々（もだ〜）

が挙げられるが、例数も20を越えない。

従って、漢字の用い方から見ても、紅葉は和語の音相の忠実な表現は、ほとんど度外視して、もっぱら意義面の感化性を狙い、あるいは漢語の字形を焦点において、文章を書いたと明言できるのである。

4-4 漢字表記の形態

(1)同字反復形式（A A型）は65種であって、うち和語の方が疊語形式でないものは7語、その余の58語はすべて疊語である。そこで、少数の例外を除けば、和語疊語に漢字疊字があてられていると言える。

(2)接尾字形式（A然型）は56種であり、A A然型あるいはA B然型は用いられていない。「疊字訓」の方では、A然型②、A A然型②、A B B然型①であったのを思い合わすとき、先ず、実作では、A然型も相当多用されていることは注目に価するところであり、逆に、A A然型やA B B然型も僅少なながら、「疊字訓」には記載されていることも指摘しておいていいかと思う。

(3)同一部首からなる熟字形式（忸怩・津濕・薺蘊など）は19例である。

漢字表記形式総数 271 種のうち、上の三類の計 140 種（52%）を除くと、残りは、「1 漢字＋と」型と、「A B」型および「A B X」型の二類がほぼ相半ばしている。

5 音象徴の和語の形態別異なり語数

「多情多恨」に用いられた音象徴の和語を形態別に整理し、かな表記語数・漢字表記語数・漢字表記かな表記両例ある語の数を調べると、表5のようになる。

表5 和語の形態と表記

形態 語・表記	異なり和語数	かな表記 異なり語数	漢字表記 異なり語数	かな表記漢字 表記両例ある 語の数	漢字表記 種類数
Aッ（と）	18	0	13	5	31

A B (と)	18	3	11	4	17
A B リ	19	9	10	0	11
A B A B	94	20	72	2	99
A ッ B リ	36	10	25	1	42
A B リ A B リ	11	6	5	0	5

(異なり和語数において、10以上のもののみを掲出した。)

紙数も尽きたので、上の表については詳論を省く。漢字化の傾向がとくに強いのは、A ッ(と)型、A B A B型、A ッ B リ型の3形態であることは明らかである。

6 お わ り に

以上、「多情多恨」の音象徴語をめぐる、「漢字のあて方」を軸にしつつ、いろいろ論じてきたが、漢字をあてられなかった和語の性質などについては論じ残した。なお、種々な面にわたって「疊字訓」との異同検討をおこなう必要があり、他面明治の作家の表記の諸相について調査し、それらとの比較対照が肝要であるが、そういうことも他日にゆずりたい。

(後記) 「多情多恨」の表記を調査するに際して用いたのは、中央公論社刊「尾崎紅葉全集」第五巻である。

なお、用例の表記に用いた〜は、おどり字である。小論はもと縦書きであったが、印刷の都合で、横書きに組み変えられたものである。また、引用例のうち、(())の中に入れた語は、厳密には音象徴語と考えられないものである。

注1 これらのフランス語、ドイツ語は、ともに「正書法」の意であるが、ときに「正字法」「正綴法」「綴字法」などとも訳される。“Rechtschreibung”は16世紀に M. Luther が “Orthographia” から固有ドイツ語に訳したものであるといわれる。(大阪外国語大学八木裕教授のご教示による。)

注2 Petit Robert には、“Manière d’écrire un mot qui est considérée comme la seule correcte.”とあり、Mario Pei の “Glossary of Linguistic Terminology” にも、“Spellingを見よ”とあって、そこには、“The conventional representation in writing of the spoken word,…”とある。しかし、ドイツでは、厳密には、Rechtschreibung の中に、大文字小文字の用法、語形変化、合成語法、句読法、日付の書き方などを含めて考える確認が、今世紀はじめにあったとのことであり(八木裕教授のご教示)、国語学で用いる「表記」の概念に近い用法もあるようである。

注3 「表記法」(『国語学辞典』池上禎造教授執筆) 参照。

注4 「紅葉『疊字訓』のうちとそと」(大阪外国語大学留学生別科「日本語・日本文化」第3号所収)

注5 表中の数値などには、一往動詞形の表記例は除外した。なお「もっと」(つねに平がな表記)も頻出するために、数えこまなかった。

注6 安本美典「文章心理学入門」(122～129ページ)

声喩の出現度は、20個の段(400字づめ原稿用紙約30枚)の中にふくまれる声喩の個数。漢字の使用率は、字数1,000字の中にふくまれる個数。

注7 吉田満の創作余談に「戦闘場面になるとどうしても漢語が出てくる云々」とある由。(同志社大学安永武人教授のご教示)

注8 「土」の用例を部分的に紹介すると、100例中の漢字表記は、「凝然」(じっと)7例、「不図」(ふと)1例、「聳然」(すっくり)1例、「緩くり」(ゆっくり)2例、「冷々」(ひや〜)1例、「輾轉」(ごろ〜)1例、計13例である。

注9 岡保生「紅葉用字考」(「明治大正文學研究」第9号)

(1972.8.30)